

関係発達の見点に基づく療育活動・教育相談を通じた 若手支援者の支援観の変容

榊原久直

(京都教育大学 総合教育臨床センター 学びサポート室)

Shifts in Novice Practitioners' Conceptions of Support Through Developmental Support Activities and Educational Consultation Informed by a Relational-Developmental Perspective

Hisanao SAKAKIHARA

抄録：本研究では、特別な教育的配慮を要する幼児・児童の支援に携わる若手支援者が、自分自身と子どもや養育者との関係性に焦点をあてた療育活動・教育相談活動への参加と、スーパービジョンを通じた共同での省察を経験するなかで、支援者としてどのような変化・成長を辿るのかについて探索的に調査したものである。調査の結果、若手支援者らは、主観的な支援の質（効力感）とそれを規定する要因（支援観）の両方に量的・質的な変化が生じていることが明らかになった。

キーワード：関係発達，教育相談，療育，支援者支援，発達障害

Key Words：relational development, educational consultation, developmental support, support for practitioners, developmental disabilities

I. 問題と目的

1. 我が国の特別支援教育の抱える課題

障害のある子どもの一人ひとりの教育的ニーズに応じる「特別支援教育」が我が国において本格的に指導した2007年からあと数年で20年を迎えようとしている。その間、子どもたちの抱える障害の重複化や多様化に伴い、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育の実施に加え、学校と福祉、医療、労働等の関連機関との連携の必要性が高まり続けている。また、ベネッセ教育総合研究所（2024）によれば、保育園・幼稚園・認定こども園の80-90%が特別な配慮を要する園児がいると回答している。加えて、90%以上の園が、対応が難しく丁寧なかかわりを必要とする園児の人数が増えていると回答している。また文部科学省（2022）の調査によると、通常の学級に在籍する児童生徒のうち、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が8.8%に上る一方、配慮を要すると担任が判断する児童生徒の70.6%が校内で特別な教育的配慮を要すると判断されておらず、支援を行うことの難しさが示唆されている。

石塚（2016）は特別な配慮を要する児童の保護者を対象とした調査の中で、教職員の子どもに対する理解不足や子どもへの接し方に対する意見が多く存在することが報告した。加えて、同調査では、教師が子どものことを理解できるような研修の必要性、子どもの毎の個性を尊重するような学習を取り入れること、子どもの気持ちを理解し、落ち着いた学校生活を提供できる人材の必要性などが明らかとなっている。他方で、こうした子どもたちへの支援は、教育現場において担任のみに任せられやすい傾向があると示唆されており（原口ら、2015）、組織全体で支援することを土台として担任が支援にあたるという支援体制の確立や、そのための保育士・幼稚園教諭、学校教諭らといった支援者支援・支援者全体の養成が急務であると考えられる。そしてそれは教育や保育の支援者に限らず、心理・福祉・保健医療など発達上の困難を抱える子どもやその養育者に関わる様々な領域の支援者においても、共通した課題であることが広く認識されるようになってきている。

2. 特別な配慮を要する子どもと自閉スペクトラム症

特別な配慮を要する幼児・児童が抱える困難さの代表的なものとして、自閉スペクトラム症(ASD)がある。そしてASD児の抱える対人面の困難さを示す一つの重要な指標としては、他者の意図を読み取る力である「心の理論」の獲得における難しさがかねてから指摘されている。かつてそれは「心の理論」欠損説とも呼ばれ、ASDの中核障害がこの機能の“欠損”であるとされてきた。しかし近年では、ASD児が器質的にこの機能を欠損しているのではなく、器質的な要因の影響を受けてこの機能の発達に困難さを抱えているという認識に切り替わってきている。

また、近年の発達心理学や発達精神病理学の知見を見ると、養育者が子どもの行動の背景にあるところ(mind)について目を向けてしまう(minded)傾向であり“子どもをこころを持ったひとりの人間とみなす傾向”だとされる心理-志向性: Mind-Mindedness (Meins,1997)や、養育者が子どもの行動を行為レベルではなく、その背後にある感情や思考といった同期について考えながら理解しようとする傾向: Maternal Insightfulness (Oppenheim& Koren- Karie,2002)など、養育者の持つ“子どもの視点から物事を見る能力(篠原, 2014)”に注目が集まりつつある。この能力は、「心の理論」と通底する部分を多分に含む能力であるといえる。加えて、この能力は子どもの安定したアタッチメントスタイルの獲得や、種々の心理機能の発達、そして脳神経系の発達にとっても重要であるということが示されつつある (Fonagy & Target, 訳書2013など)。

更にこうした能力を包括する概念として、メンタライゼーション(Mentalization)という知見から研究や臨床実践も行われ始めている。メンタライゼーションとは、自他を感情や意図といったこころを備えた存在として捉えて心的状態と行動を関連付けて解釈するプロセスやその能力を指す概念である (Fonagy et al,2002)。「こころでこころを思いめぐらす働き」とも表現されるこのメンタライゼーションは、Bion (訳書 1999) の思考のコンテインメント機能と通底するものであり、強い欲求や情動を調整するのに役立つとともに、それらのものにより耐えやすくするのに貢献する心理機能だと考えられている (上地, 2015)。

また、メンタライゼーションは2つの側面からなり、他者の意図や感情を理解する“対他的メンタライジング”と、自分自身の感情の動きに気づく“対自的メンタライジング”とが絡み合うものだと考えられている (Bateman & Fonagy, 訳書2008)。上述した間主観性や子どもの視点に立つ能力は、この前者の対他的メンタライジングに関するものであるといえるだろう。加えて、「心の理論」の獲得の困難さに代表される、ASD児らの対人的な困難さの一側面もまた、対他的メンタライジングの困難さとして捉えられるようになってきている。さらには、発達に困難さを抱える子どもたちが自分自身の感情を言葉にして表現したり、感情をコントロールしたりすることができず、パニックや行動化によって溢れさせてしまう姿は、対自的メンタライジングの困難さとして捉えることも可能である。

そしてこのメンタライゼーションの能力の獲得や発揮は、ASD児が示している通り、この能力の獲得や発達は器質的要因を土台としながらも、「良性かつ内省的で、十分に調律的であるような、より成熟したこころを持つ者との相互作用に決定的に依存している (Fonagy& Target, 2003)」と考えられている。すなわち、メンタライジングの力は、他者からメンタライズされる体験によって育まれる力なのである。加えて、自分自身のこころの動きを理解していること、すなわち内省的で対自的メンタライジングが働いているということが、対他的メンタライジングの力を発揮する上で重要であると考えられている。

このように、特別な配慮を要する幼児・児童生徒を含めて、子どもの支援を行う際には、関わり手である大人側(支援者)の“子どもの視点から物事を見る能力”、すなわち対他的メンタライジングの力は子どもの発達上、極めて重要であり、同時にその能力が十分に発揮されるためには、支援者自身の対自的メンタライジングが十分に機能していることが求められると考えられる。

3. 発達障害ブームの功罪を乗り越える

子どもが何らかの障害を有するとき、子どもを取り巻く関係性が負の様相を孕むことが起こりやすく、(対人関係の) 障害を持つがゆえに、周囲との関係の中で、二次的、付加的に形成されてゆく症状や障害特性があり、

それを関係障とと呼ぶ（小林・鯨岡，2005）。そしてこの関係障の形成は，他者との関係性の中でという言葉の通り，器質的な障を有する子ども側だけでなく，関わり手側の要因や，両者の相互作用によって形作られるものである。そしてこの関わり手には，家族だけでなく，子どもたちと日々を共に過ごす，保育士・幼稚園教諭・学校教諭らといった支援者もその例外ではない。

我が国ではここ20年ほどの「発達障ブーム」と呼ばれる時を経て，現代では多くの人々がASDの特性に関する知識を有するようになったが，その一方でその知識にとらわれ，時に子どもの言動を障特性に当てはめることによって関係性の発達が阻害されてしまうことがあるという危険性が指摘されつつある（小林・大久保，2007）。すなわち，障があるという認知や障特性に関する知識が，支援者側の“子どもの視点から物事を見る能力”を蝕み，子どもの障特性を形成することに支援者側が寄与してしまう可能性を危惧する指摘であると換言できるかもしれない。

こうしたことを踏まえると，我が国の特別な配慮を要する子どもたちへの支援を担う支援者支援，支援者養成においては，ただ障や障特性に関する知識の習得を推し進めるのではなく，そうした知識が子どもの理解を時に阻害することに留意し，子どもの抱える発達上の困難さを踏まえ，その上でその子なりの視点から物事を考えることができるように支援することが必要であると考えられる。

“子どもの視点から物事を見る能力”の向上に対他的メンタライジングと対自的メンタライジングの両方が重要であることは上述の通りだが，臨床心理学の実践現場において，支援者（セラピスト）のこれらの能力の維持・向上は継続した臨床実践とスーパービジョンによる振り返りによって担保されることが通例である。スーパービジョンとは，支援者が自身の担当するカウンセリングにおける要支援者とのやりとりや，その中で支援者に生じた感情，支援者の持つ要支援者への見立てと方針などを，他の支援者と共同で振り返る営みを指す。すなわち「良性かつ内省的で，十分に調律的であるような，より成熟したところを持つ者との相互作用(Fonagy& Target, 2003)」を体験する機会となる。

そこで本調査では，以下の二つを目的として探索的な調査を行うものとする。まず，第一に，ASD児とその養育者が訪れる運動遊びを介したプレイセラピーを基にした療育活動と教育相談の活動にボランティアの支援者として参加する大学生らが抱く障やその支援に対するイメージがどのようなものであるかを明らかにすることである。第二には，そうした障やその支援に対する若手支援者のイメージが，臨床活動への継続的な参加とスーパービジョンを通じてどのように変容するのかについて検証することである。それらを通じて，発達上の困難さを抱える子どもやその養育者に関わる若手支援者の初期発達やその変容プロセスを明らかにし，支援者養成や支援者支援の一助となりうる基礎的資料を提供することを目的としている。

II. 方法

1. 対象者

療育活動と教育相談活動に1年間（計28回）セラピストとして参加した臨床心理学を学ぶ大学生4名，大学院生2名。

2. 療育活動と教育相談

様々な感覚遊具のあるプレイルームでの集団療法(3家族)の状況下で，対象児と支援者2名（1名は補助）が感覚運動遊びを介したプレイセラピーを45分，養育者へのコンサルテーションを5分の枠組みで半年間に14回ずつ行った。対象となった家族は，幼児期から児童期前期にある発達上の困難さを抱える子どもたちと，心理的な課題を抱えるその養育者であった。子どもの抱える困難さとしては，発達障，知的障，肢体不自由，染色体異常などがあり，養育者の抱える困難さには，障受容の困難さ，抑うつ症状，パニック障，虐待の疑い，ドメスティック・バイオレンス（DV）などであった。

セラピーは“成り込み”つつ“巻き込む”という早期母子関係に見られる間主観的に子どもの感情や意図を汲

み取りながら、関係性を構築していく関わり(榊原, 2013)を中心に行った。加えて、教育相談として、単回で来談される家族を別途1家族受け入れ、養育者には45分間の公認心理師・臨床心理士の資格を持つ支援者が面談を行い、子どもは療育活動と同様の体制でセラピーを行った。

本調査の対象者は、これら2つの活動に関して、子ども担当の支援者として参加し、子どもの発達状況、子どもや養育者の心理的課題を踏まえて活動の目標を立て、支援活動に主体的に関わることを行った。

活動後は毎回、約2時間のグループ形式でのスーパービジョンを行い、公認心理師・臨床心理士や他の参加者らと振り返りを行った。

3. 参加時期

X年4月～X+1年3月。

4. インタビュー調査

SEIQoL-DW (Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life: a Direct Weighting procedure for Quality of Life Domains) 日本語版(大生・中島, 2007)の変法を実施した。SEIQoL-DWは、個人の生活の質(Individual Quality of Life)を評価するための1手法であり、半構造化面接法とVAS(Visual analog scale)による評価法と重み付けの理論により成り立つものである。SEIQoLは世界各国で使われている生活に関する代表的なPRO (Patient Reported Outcome: 患者の報告するアウトカム)であり包括的なQOL(生活の質)評価法の一つとされている。基本的な手続きとしては、①日々の生活の中で“大切に思うこと(カテゴリー:領域)”を5つ挙げてもらうこと、②それぞれの“状態(満足度)”を100点満点で評価してもらうこと、③それら5つの“重要度(重みづけ)”を円形のパネルを色分けすることを通して評価すること、という3つのプロセスからなる。

本研究では、個人の生活の質ではなく、障害のある子どもとその家族の支援に対する主体的な取り組みの質を問う目的から、この半構造化面接を一部改編し、「あなたの生活において、あなたが重要であると感じている…」というインタビューガイドを、「あなたが今後担当するであろう子どもとご家族に対する支援において、あなたが重要であると感じている…」と修正して実施することで、支援者として思い描く“支援の質(Quality Of Support: QOS)を測定した。加えて、領域毎に数値化した満足度と重みづけの積の合計から“総合的なQOS指数(QOSスコア)”を算出した。

インタビューの実施時期は、療育活動・教育相談の活動に1年間携わった後(参加後:X+1年4月)であり、その時点での主観的なQOSを測定するとともに、活動に参加する時点(開始時:X年4月)のQOSを回想法で尋ねた。まず参加後のカテゴリーに対して満足度と重みづけを尋ね、参加後のカテゴリーに対する開始時の満足度と重みづけを尋ねた。続いて、開始時のカテゴリーとその満足度と重みづけを尋ね、開始時のカテゴリーに対する参加後の満足度と重みづけを尋ねた。

5. カテゴリーの分析

同活動に1年以上参加する臨床心理学を学ぶ大学院生4名(対象者とは異なる者)らにより、QOSの“大切に思うこと(カテゴリー:領域)”を内容の類似性の観点から分類・概念化した。なお概念名に関してのみ、筆者が概念間の整合性を鑑みて一部修正を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は神戸松蔭女子学院大学研究倫理審査の承認を得て行ったものである。

Ⅲ. 結果と考察

1. QOSを規定する領域とその変容

QOSを規定する領域として5の大カテゴリーと、13の中カテゴリー、24の小カテゴリーが得られた(Table1)。

Table 1 QOSを構成する領域についての回答の分類結果とその反応数

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	領域名の例		領域数	領域数(前)	領域数(後)
専門性	専門性の多様さ	多様な専門性(心理的サポート、運動や筋肉の使い方、思いをはせる事、言語的コミュニケーション)	2	1	1		
		専門的な知識	知識(遊びのレパートリー、専門知識)、知識を増やす事	2	1	1	
	遊びの発想力	遊びのレパートリー	遊びのバリエーション、遊びのレパートリーを増やす、発想力	3	2	1	
		遊びの段階	その子にあったステップを考える	1	0	1	
	視点・立ち位置	客観的視点	目の前の現実を重視する、フラットに見る、冷静な立ち位置を見失わない事	5	0	5	
		セラピスト側の視点	セラピストの自由度、期待(支援の目標、子どもや家族の思い、自分への期待)	2	0	2	
		子ども側の視点	気持ちの受け入れ、子どもの視点に立つこと、子どものためを思っているルールの線引き	5	2	3	
	環境設定	安全の確保	安全管理、ケガなく終わる事	5	4	1	
		安心感の提供	安心できる空間づくり	2	1	1	
	感情を扱う	楽しさ	楽しさの共有	楽しさの共有	1	0	1
楽しさを産み出す			笑顔を大切にしよう、子どもの楽しい感情、笑顔を増やす事(子ども、親、担当者)	5	3	2	
セラピストの不安		自己視点による不安	個人的不安を出さない事(普段段関わりのない子なので…)、特別な活動を行わなければならない	3	3	0	
		他者視点による不安	親御さんの顔色、完璧な支援者として対応する事	3	3	0	
子どもへの目標		障碍の克服	訓練と治療、日常生活においてできることを増やす	3	3	0	
		自尊感情を育む	価値観の持ち方(勝ち負けや優劣だけではない、価値観を持ってほしい)	2	1	1	
親への目標		気持ち言葉を言葉にして返す	言葉にして皆が受け入れられる形にすること	2	1	1	
		親のケア	親をねぎらう、親のニーズをちゃんときこう	3	2	1	
親への目標		親子関係を密にする	親子の絆	1	0	1	
		日常への広がり	日常への架け橋、体験の鑄型を作る	3	0	3	
信頼関係	セラピストと親子との信頼関係	信頼の循環、信頼関係	2	1	1		
	セラピストと子どもとの信頼関係	セラピストと子どもとの信頼関係	1	1	0		
セラピストと他者の関係性	セラピストと親との連携	コミュニケーション、連携と共有	2	0	2		
	セラピスト間の連携	報連相	1	1	0		
		情報を知る	情報収集(親やや本人、きょうだいから)	1	0	1	

なおここでは、大カテゴリー名を【】、中カテゴリー名を『』、小カテゴリー名を「」にて表記する。

対象者らは、特別な教育的ニーズを抱える親子への支援に際して、①多角的かつ多様な【専門性】を有すること、②安全と安心感のある【環境設定】を行うこと、③親子の情緒面の支援を行うと共に自分自身の不安をコントロールするという【感情を扱う】こと、④子ども、養育者、親子関係のそれぞれに対して【目標】をもって支援すること、そしてそれらを行うために⑤【セラピストと他者の関係性】の発達を支援することを心掛けているようであった。これらの結果は本調査のフィールドが、様々な感覚遊具のある空間の中で親子に対して行われる関係発達を支援することを旨とした心理発達支援の場であるという特色が色濃く影響しているのもであると理解できる。

1年間の活動への参加の前後での領域ごとの回答数を比較すると、参加時は【環境設定】における『安全の確保』、【感情を扱う】における『セラピストの不安』、【目標】における「障碍の克服」が参加後と比べて多かった。このことから、対象者らの抱く子どもの障碍を克服する支援を安全に行わなければならないという思いと、それが自分に務まるのかという不安にとらわれている様子が見て取れた。

安全を巡る意識は、心理や特別支援の領域に限らず、けがや病気等のリスクがある支援の現場においては重要な要因であると考えられている。若手看護師らを対象とした調査によると、若手支援者はミスへの恐怖から安全に過度に囚われる傾向に陥りやすいとされており（堀・林・井村・兼児, 2021）、更にそうした安全への囚われが職業性のストレスを高め、支援者としてのバーンアウト（燃え尽き症候群）や離職リスクに繋がること（Wang et al., 2024）が明らかとなっている。

また、「障碍の克服」という意識を巡っては、特別支援教育を含む教員養成課程の学生を対象とした複数の研究においても、障害についての理解やインクルージョンについての肯定的な意識の変容が見られた後であってもなお、障碍を治すもの・克服すべきものであるという潜在的な意識が遷延すること（Mason & Connor, 2022; Collins, Moore, & McDonald, 2022）が指摘されており、本調査の対象者においても同様の傾向が伺われた。子どもの抱える発達上の凸凹であったり障碍特性を理解しそこに留意しながら支援を行うことや、そうした困難さの改善を試みることそのものは、子どもや養育者の双方の日常生活を考えた場合に重要な支援の要素であるが、そこに過度に意識が向かってしまう場合には、子どもに変化・変容を強いる関わりとなってしまう、結果的に子どもに過重な負担をしいることや、子どものあるがままの姿を否定し、自尊感情の低下を招く関わりとなってしまうため、注意が必要である。

それに対して参加後では、【専門性】における「客観的視点」や「セラピスト側の視点」、【目標】における「日常への広がり」、【セラピストと他者との関係性】における「セラピストと親の連携」が参加時と比べて多かった。このことから、1年間の活動への参加を通じて、障碍という視点に捉われすぎずに子どもの思いをくみ取ることや、親子だけでなく支援者自身の抱く願いも尊重しながら関わることの大切さを感じるようになっていくという変化が見て取れた。また、支援の場で生じたやりとりがその場限りものではなく、日常での親子のやりとりへと広がっていくことを意識した関りがなされるようになっていくという変化も見取れた。

セラピストの専門性の発達については様々な側面での変化が必要となることが指摘されているが、その中でも専門的な視野や視点が広がっていくという変化や、自分一人で問題を解決しようとするのではなく要支援者や関係者、他の支援者らを含めた様々な人と連携を図ること必要性を受け止めるようになっていくという変化は、支援者の発達段階の1つの指標として捉えられているものである（Rønnestad & Skovholt, 2003）。

このように、本調査では支援者が抱く“障碍”そのものに対して抱くイメージの変容は見受けられなかったものの、親子に対する支援を巡る視点やそれを実行する際に心構えといった支援に関するイメージ“支援観”については、教育相談や療育活動への参加の前後において変容が生じることが示唆された。今後、こうした支援観の変化と並行して障碍そのものに対するイメージ、すなわち障害観についてはどのような変化が生じているのかについてに焦点を当てて調査を行うことも有用であると考えられる。

2. QOSスコアの変容

参加時の領域に基づくQOSスコア、参加後の領域に基づくQOSスコアに関して、それぞれ参加時と参加後の

値に差が生じるかを検討するためWilcoxonの符号付き順位検定を行った(Figure1)。その結果、QOSスコアは、参加後の領域に基づくQOSスコアにのみ、参加時と参加後の値に有意差が見られた($Z=-2.20, P=.028$)。

これらの結果から、若手支援者らは臨床活動への参加やスーパービジョンを通じた共同での振り返りを1年間経験ことにより、主観的な支援の質を規定する領域(支援観)を変容させつつも、当初保持していた支援観に基づく主観的な支援の質そのものの変化・向上を実感するまでには至っていないことが明らかとなった。ただし、こうした臨床実践と振り返りを経験する中で新たに獲得した支援観にのみ着目すると、その支援観に基づく主観的な支援の質に関しては変化・向上を実感しており、支援者としての効力感を抱くことが可能となっていた。

初心セラピストの自己効力感に関する先行研究(Mullen et al., 2015)によれば、訓練の進行とともに支援者の自己効力感が上昇していくという量的な変化のプロセスが示されているが、従来の研究では支援者の効力感の変容の背景にある、それを規定する要因、すなわち本研究における支援観の変遷という質的な変化のプロセスまでは検討がなされていない。

そのため、今後は支援者の効力感とその変容を検討する際には、その量的な変化だけでなく、効力感に影響しうる背景要因の質的な変化を合わせて検討することで、より支援者の変化・発達や、その支援を多角的に捉えることが可能になると考えられる。

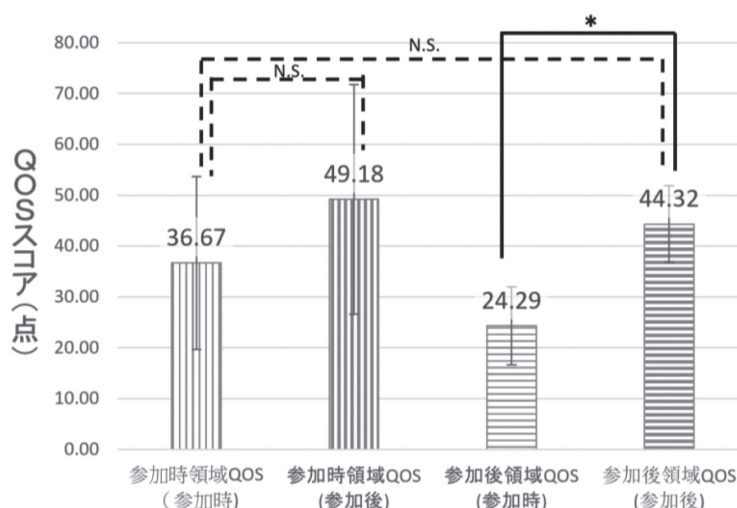


Figure1 QOSスコア平均の推移

3. 若手支援者の変容プロセスを巡って

このように若手支援者は、子どもや養育者との支援活動とその振り返りを通じて、支援者が知覚する主観的な支援の質や支援者としての効力感と、それらを規定する要因となる支援観そのものの両方を変化させるという複雑な動的変化を体験することが明らかとなった。

本研究では回想法による2時点の比較を中心にその変化を比較検討したが、今後、こうした質的・量的な変化が、どのような経験やきっかけによって生じるのかという変化を促す要因の検討が必要となる。加えて、そうした内的な変化が支援者にとってどのような心理的体験となっているのかという内的プロセスの検討とともに、そうした変化を危機的なものではなく若手支援者が耐えうる範囲で生じるものとするためにはどういった保護的な要因が必要となるのかの検討が必要になると考えられる。Bion (訳書 1995) はカウンセリングにおける要支援者の内的な変化を心理的な意味での死であると形容し、その心的苦痛や怖さを指摘しているが、それは要支援者のみに当てはまるものではないとされている。特に、支援者としての発達段階の初期にあたる若手支援者にとっては支援者としての効力感是非常に揺らぎやすく、その揺らぎが大きすぎた場合、離職に繋がったり、変化・成長という支援者としての発達の停止に繋がらうこと (Cook et al., 2021 ; Skovholt & Rønnestad, 2003 など) が予想されるため、そうした支援者の初期発達におけるリスクから若手支援者を保護し、その発達を促進する要因を

明らかにすることは、二重の意味で有用であると考えられる。

また本研究では大学生や大学院生を対象としてその変化を検証したが、支援者としてのキャリアがより長い者においても同様の変化が生じうるかについて検証を行うことで、障碍観や支援観の変容が若手においてのみ見られうるものであるのか、両者の支援者の変容にどのような差異があるのかについて検討することで、より幅広い支援者のキャリア発達に寄与することが可能となると考えられる。

引用文献

- Bateman, A. & Fonagy, P. (2004). *メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害——MBTが拓く精神分析的な精神療法の新たな展開*. 狩野力八郎・白波瀬丈一郎 (監訳). 岩崎学術出版社. 2008.
- ベネッセ教育総合研究所 (2024). 『第4回 幼児教育・保育についての基本調査 報告書』.
- Bion, W. (1984). *精神分析の方法 I ——セブン・サーヴァンツ*. 福本修 (訳). 法政大学出版局. 1999.
- Bion, W. (1995). 『ピオン臨床セミナー 1967-1969』 中井久夫・野村美江子 (訳). 誠信書房.
- Collins, K. M., Moore, R., & McDonald, S. (2022). Expanding preservice teachers' conceptions about disability through young adult literature. *Journal of Special Education Preparation*, 2(1), 1-12.
- Cook, R. M., Fye, H. J., Jones, J. L., & Baltrinic, E. R. (2021). Self-reported symptoms of burnout in novice professional counselors: A content analysis. *The Professional Counselor*, 11(1), 31-45.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York: Other Press.
- Fonagy, P. & Target, M. (2003). *発達精神病理学からみた精神分析理論*. 馬場禮子・青木紀久代 (監訳). 岩崎学術出版社. 2013.
- 原口英之・野呂文行・神山 努 (2015). 幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較—. *障害科学研究*, 39, 27-35.
- 堀 泰子・林 智子・井村香積・兼兒敏浩 (2021). 新人看護師の経験を通じた医療安全に対する認識. *医療の質・安全学会誌*, 16(3), 291-301.
- 石塚誠之 (2016). 学校教育において特別な配慮を要する児童に対する支援の実態と課題 — 保護者のニーズに関する調査研究から. *北翔大学教育文化学部紀要*. 1, 1-14.
- 上地雄一郎 (2015). *メンタライジング・アプローチ入門——愛着理論を生かす心理療法*. 北大路書房.
- 小林隆児・大久保久美代 (2007). いまなぜ関係性を通じた発達支援なのか. 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三 (編). *そだちの科学 (発達障害のいま)*. 日本評論社. 8, 23-27.
- 小林隆児・鯨岡峻 (2005). *自閉症の関係発達臨床*. 日本評論社.
- Mason, A. M., & Connor, D. J. (2022). The persistence of deficit language: An investigation of general education pre-service teachers' talk about disability and inclusion. *Teacher Education Quarterly*, 49(1), 6-27.
- Meins, M. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex, UK: Psychology Press.
- 文部科学省 (2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査 (令和4年度) 結果.
- Mullen, P. R., Uwamahoro, O., Blount, A. J., & Lambie, G. W. (2015). Development of counseling students' self-efficacy during preparation and training. *The Professional Counselor*, 5(1), 175-184.
- 大生定義, 中島孝 (2007). SEIQoL-DW (Schedule for the Evaluation of Quality of Life-Direct weighting) 日本語版 (初版), 特定疾患患者の生活の質 (Quality of Life, QOL) の向上に関する研究班.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness and preschoolers emotion and behavior problems: Reciprocal influence in a therapeutic preschool program. *Infant Mental Health journal*, 25, p352-

367.

Rønnestad, M. H., & Skovholt, T. M. (2003). The journey of the counselor and therapist: Research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, 30(1), 5–44.

榑原久直 (2013). 関係の中で生きる子どもとして理解, 援助すること——親と子の関係性援助の見点からの感覚遊び. 神戸市総合児童センター紀要 “育ちゆくこども”, 8, 126–135.

Skovholt, T. M., & Rønnestad, M. H. (2003). Struggles of the novice counselor and therapist. *Journal of Career Development*, 30(1), 45–58.

篠原郁子 (2014). 心を紡ぐ心—親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達. ナカニシヤ出版.

Wang, X., Liu, M., Xu, T., Wang, K., Huang, L., & Zhang, X. (2024). New nurses' practice environment, job stress, and patient safety attitudes: A cross-sectional study based on the job demands–resources model. *BMC Nursing*, 23, article 473.